

『源氏物語』 「上衆めく・上衆めかし」考

— 明石の君論として —

吉海 直人

〔要旨〕 今回は、桐壺巻で注目した「上衆めく・上衆めかし」

について分析・調査してみた。その結果、①平安朝語であること、②用例が少ないこと、③同音異義語の「上手めく・上手めかし」と不分明になっていることが明らかになった。それをきちんと区別すると、『源氏物語』においては、桐壺更衣と明石の君にのみ用いられた特殊用法であることが浮上した。しかも「めく・めかし」の原義から、それによって身分の低さ故の悲哀を表出していることが読み取れる。それ故、明石の君論に有効な表現と思われる。

一、問題提起

『源氏物語』桐壺巻には、帝に寵愛された桐壺更衣のことが、おぼえいとやむごとなく、上衆めかしけれど、わりなくまつはさせたまふあまりに、さるべき御遊びのをりをり、何ごとにもゆるゑあることのふしぶしには、まづ参上らせたまふ、
(新編全集桐壺巻19頁)

と描写されている。ここに用いられている「上衆めかし」は、桐壺更衣の重要語と思われたので、かつて『源氏物語』(桐壺巻)を読む(翰林書房)の「鑑賞7」において、

「上衆めかす」という語は、「下衆」の反対語である「上衆」に「めかし」という接尾語(他動詞化)が付いたもの

二、用例の分布

だが、他に「あまり上衆めかしと思したり」（松風巻23頁）という例が見られる。また「めく」が付いて自動詞化した例として、「忍びやかに調べたるほどいと上衆めきたり」（明石巻93頁）もある。この二例はともに明石の君に関するものであるが、彼女にも桐壺更衣と同様に、いくら上衆めかしても根本的に上衆でありえないと言う悲しい現実（身分差）があった。こう考えると、明石の君こそが桐壺更衣の正當なゆかり（血縁）であることになる。藤壺のゆかりたる紫の上と明石の君の対比は、実はゆかりの二分化によって生じたものなのだ。（32頁）

とコメントしたことがある。さらに改訂版の補注8において、用例は「上衆めかす」「上衆めく」合わせて全七例で、そのうちの四例までが明石の君に関するものである。（166頁）

と、明石の君を考える上でのキーワードたりうることを示唆しておいた¹⁾。しかしながら桐壺巻の注という制約もあって、必ずしも明石の君の用例がきちんと論証されているわけではなかった。そこで本論では「上衆めく・上衆めかし」について、あらためて詳細に検討してみた次第である。

問題の「上衆めく・上衆めかし」という語は、どうやら用例の少ない語のようである。確認のために用例を広く調査してみた。手始めに『古典対照語い表』（笠間書院）を参照したところ、「上衆めく」が『源氏物語』五例・『紫式部日記』一例・『徒然草』一例となっていた。また「上衆めかし」は『源氏物語』二例のみあがっていた。

これを参考にしながら他の作品を調べたところ、次のような結果になった。

	平中物語	うつほ物語	一条撰政御集	源氏物語	紫式部日記	紫式部集	狭衣物語
上衆めく	1	1	1	5	1	1	0
上衆めかし	1	0	0	2	0	0	3
計	2	1	1	7	1	1	3

夜の寢覚	2	2	4
浜松中納言物語	1	0	1
無名草子	0	1	1
とりかへばや	1	0	1
木幡の時雨	0	2	2
徒然草	1	0	1
計	15	11	26

『万葉集』や『古今集』などの歌集には用例が見当たらないので、どうやら歌語ではなさそうである。また初出が『平中物語』まで下るので、とりあえず平安朝語と考えておきたい。といつても『落窪物語』・『蜻蛉日記』・『枕草子』・『栄花物語』などに用例は見られない。そのため全用例はわずか二十六例であった。それもあつて「上衆めかし」は、動詞なのか形容詞なのかの判別がつけにくい。前著では他動詞としていたが、『夜の寢覚』に「上衆めかし」という連用形が認められるので、本論では「他動詞」説を撤回して「形容詞」としておきたい。全体を見渡すと、用例が少ない中で『源氏物語』の「上衆めく」五例と『狭衣物語』の「上衆めかし」三例がやや目立って

いるようである。この「上衆めく・上衆めかし」は、「上衆（上種）」に接尾語の「めく・めかし」が付いて派生した動詞・形容詞と先に述べた。面白いことに『源氏物語』には名詞「上衆」の用例は見当たらない⁽²⁾。その派生語に「心」を冠した「心上衆」があるが、これも用例は非常に少ないようである。『源氏物語』には一切用いられておらず、平安後期以降の『無名草子』中の『夜の寢覚』の女君評に二例、「とりかへばや」に一例認められるくらいである⁽³⁾。

ついでながら「上衆」の反対語は「下衆」であるが、こちらは「下衆めく」「下衆めかし」の例は認められない。そのかわりに「下衆下衆し」という形容詞が認められる。『源氏物語』に「下衆下衆し」は三例用いられているが、用例は東屋巻・蜻蛉巻・手習巻各一例と、宇治十帖にのみ用いられているので、これもやや特殊（非貴族的）な用いられ方がされていると言えそうである⁽⁴⁾。

こうしてみると、「上衆」「下衆」に関しては、派生語を含めかなり奇妙な言葉と思われる。

三、「源氏物語」以前の「上衆めく・上衆めかし」

『源氏物語』の用例を検討する前に、『源氏物語』以前の用例を見ておきたい。初出例としては『平中物語』の二例であるが、まず「上衆めかし」は、

ささなみの長等の山の山彦は問へど答へず主しなれば
1 ことなることなき人の、いと上衆めかしければ、ものもい
はでやみにけり。
(新編全集『平中物語』467頁)

とある。ここは現代語訳に「とりわけどうということもない女が、たいそう身分のある女のような返歌をするので、馬鹿馬鹿しくて、それ以上、歌も言い掛けないで、やめてしまった」とあるように、「ことなることなき人」が「貴人らしく振舞う」っている例である。ここでの女の振る舞いは、かえって男からマイナス評価されている。身分と振る舞いが不一致ということ、これは『源氏物語』のマイナス用法に近いようである。もう一例の「上衆めく」の方は、

勿来てふ関をばすゑであふことをちかたふみにも君はな
さなむ

2 かういへど、この女さらにあはず、上衆めきければ、男い

ひわびて、ものもいはざりければ、
(同479頁)

と出ている。現代語訳は「お高くとまっている」とあり、やはり女の振る舞いは男から批判的にとらえられている。『平中物語』の二例はともに女性の例であり、本来貴人ではないのに「貴人らしく振る舞う」ことで、男からマイナス評価されるという用法に統一されていることになる。また二例とも和歌の直後に用いられていることにも留意しておきたい。

次に『うつほ物語』国譲上巻の、

3 中納言ものもの給はず、涙をのみ流したまへば、おとど、
いかばかり上衆めきたりし人ぞ、かう涙をも惜しまず、世
の中を憂しと思ひたるを、おほろけにはあらざめり、

(新編全集『うつほ物語』125頁)
があげられる。これは正頼が実忠の振る舞いを見ての感想(心内)であるが、ここは「貴人らしい」で問題あるまい。というよりも実忠は真正正銘の貴人であるから、本来なら「めく」を付ける必要はあるまい。いずれにしてもここはそのままプラス評価としたい。なお『うつほ物語』は『平中物語』とは違って、男性の例であること、そしてプラス評価になっていることが注目される。

それに対して『一条撰政御集』の例は、

4はやうの人はかうやうにぞありける。いまやうのわかい人はさしもあらで上ずめきてやみなんかし。

(『一条撰政御集注釈』5頁)

とあり、『伊勢物語』のパロディとして今の男性のマイナス評価となっている。

では『源氏物語』と同じ作者の『紫式部日記』の例はどうだろうか。

5上臈中臈のほどぞ、あまりひき入りぎうずめきてのみはべるめる。さのみして、宮の御ため、もののかざりにはあらず、見ぐるしとも見はべり。

(新編全集『紫式部日記』196頁)

本文には「ぎうずめき」と仮名表記されているが、頭注七に「上衆めく」で、貴人らしい様子をする事とあるので、「上衆めく」の例としておきたい。「上臈中臈」は女房としては上位だが、宮仕えということでは貴人とは言えない。その女房が「上衆めく」こと(パフォーマンス)は、決して宮(中宮彰子)のためにならないと非難している。この例は『平中物語』同様、「お高くとまっている」とマイナス評価されていること

になりそうだ。

『紫式部集』の詞書にも「上衆めく」の例が拾える(歌語ではない)。

かばかり思そしぬべき身を、いといたうも上衆めくかなと、いひける人をききて、

6わりなしや人こそ人といはざらめみづから身をやおもひすつべき

これは紫式部自身の出仕にまつわることであるが、紫式部自身がお高くとまっている」と批判されている。あるいは自身のそういった体験が、『源氏物語』に投影されているのかもしれない。

以上、『うつほ物語』『一条撰政御集』の例を除くと、それ以外の例は全て女性であり、しかも本来貴人でないのに貴人らしく振る舞う場合にマイナス評価として用いられていることがわかった。『源氏物語』の例は、そのマイナス用法を継承・特化させていることになりそうだ。

四、「上衆」と「上手」

では次に『源氏物語』の用例を考えてみたい。全七例を巻ごとに分類したところ、

上衆めく 紅葉賀1 明石2 若菜下2
上衆めかし 桐壺1 松風1

となった。用例が少ないので、この分類から顕著な特徴は看取できそうもない（「下衆下衆し」と対照的に宇治十帖に用例なし）。そこで視点を變えて、誰に使用されているかを調べてみたところ、前述のように明石の君に四例、桐壺更衣に一例用いられていることがわかる（他の二例は紫の上（紅葉賀巻）と不特定の男性（若菜下巻）の用例）。これはかなり偏った用いら方ではないだろうか。

なお調査していて気付いたことだが、「上衆めく」の用例の中に、同音異義語の「上手めく」（「上手」の派生語）が混入しているようである。これについて、もう少し詳しく考えてみたい。問題の「上衆」と「上手」は、仮名表記では同じく「じゃ

うず（ざうず）」となり、しかもともに「めく」「めかし」と結合しているので、大変見分けが付きにくくなっている。

そこで手始めに古語辞書を見たところ、小学館『古語大辞典』・角川『古語大辞典』ともに「上手めく・上手めかし」は立項されていなかった。さすがに岩波『古語辞典』では、「上手」の項に「上手めき」項が付いていたが、「上手めかし」はなかった。また小学館『日本国語大辞典第二版』では、「上手めかす」（他動詞）が立項されていたが、用例は近世の『浮世風呂』であった。要するに用例が少ないこともあって、「上衆めく・上衆めかし」と「上手めく・上手めかし」は、辞書ですら曖昧なままになっていたのである⁽⁵⁾。

しかし両者の意味ははっきり相違しており、「上手めく」は楽器演奏が巧み（上手）なことである。例えば紅葉賀巻の、
I おもしろう吹きすましたるに、掻き合はせまだ若けれど、
拍子違はず上手めきたり。
（紅葉賀巻332頁）

は、新編全集では積極的に「上手」の漢字があてられており、意味も「巧みに・達人のように」となっている。ここはそれで問題なさそうであるが、「まだ若けれど」とあるように、紫の上の演奏は必ずしも「上手」の域に達しているとはいえない

ことを押さえておきたい。同様に若菜下巻の、

II 次々、数知らず多かりけるを、何せむにかはと聞きいかむ。

かかるをりふしの歌は、例の上手めきたまふ男たちもなかなか出で消えして、松の千歳より離れていまめかしきことなければ、うるさくてなむ。
(若菜下巻174頁)

も「上手めき」と表記されている(男性の例)。ここは歌のうまい男性を引き合いに出しているところなので、新編全集では「上手めき」と考えているのであろう。この例にしても「めき」とあることに留意しておきたい。

さて、問題の明石の君は琵琶の名手であるから、必然的に「上手めく」が使われている。それが若菜下巻の、

III 掻き合はせたまへるほど、いづれとなき中に、琵琶はずぐれて上手めき、神さびたる手づかひ、澄みはてておもしろく聞こゆ。
(若菜下巻190頁)

であり、また明石巻の、

IV みづからもいとど涙さへそそのかされて、とどむべき方なきにさそはるるなるべし、忍びやかに調べたるほどいと上衆めきたり。
(明石巻266頁)

である。若菜下巻の用例は女衆の場面であるが、身分とは正反

対に明石の君・紫の上・明石女御・女三の宮の順(おそらく上手い順)に描かれている。ここはプラス評価でよさそうである。

続く明石巻の用例について、新編全集の頭注三では「上衆めく」は、貴人らしくふるまう、貴人らしく見える、の意。」とコメントされているが、これも明石の君の琵琶の演奏に対するものなので、「上手めき」の方が妥当ではないだろうか。

以上のように明石の君に限って、「上衆めく」と「上手めく」の両方が用いられていることが明らかになった。そのため用例が倍増しているばかりか、その区別までもが不分明になっているようである。これに関して内藤聡子氏は、特にIIIの明石の君の例について、むしろ「上衆」と解すべきことを説いておられる⁶⁾。

その根拠として引用されているのは、少女巻において頭中将が母大宮に語った、

女の中には、太政大臣の山里に籠めおきたまへる人こそ、いと上手と聞きはべれ、物の上手の後にははべれど、末にたなりて、山がつにて年経たる人の、いかでさしも弾きすぐれけん。かの大臣、いと心ことにこそ思ひてのたまふをりをりはべれ、他事よりは、遊びの方の才はなほ広うあはせ、

かれこれ通はしはべるこそかしこけれ。独りごとにて、上手となりけんこそ。めづらしきことなれ。(少女卷34頁)

である。頭中将は明石の君の琵琶の技量を「いと上手」と述べており、源氏もまた「上手」と肯定・評価していたことが語られている。つまり明石の君の琵琶の技量は、公私ともに「上手」とされているのだから、後になってわざわざそれを「上手めく」と表現するのは相応しくない(後退)ということ、ここはむしろ明石の君の人柄を表す「上衆めく」とすべきではないかというのが内藤氏の御論である。

ただし頭中将自身、明石の君の演奏を直に聞いているわけではないこと、これがあくまで会話の中の言説であることも考慮しなければなるまい。しかも内藤氏の論理は、「上手めく」は「上手」より劣ることが前提となっているようだ。確かに紫の上の例はそう考える方がベターであろう。しかしながらここにマイナス要素は認められそうもない。琴の演奏(プラス評価)の場合、「上手めく」は「上手」に劣るというのではなく、「上手」と同等の言い回しと考えたい。

五、『源氏物語』の「上衆めく・上衆めかし」

ここであらためて「上衆めく・上衆めかし」の用例を確認しておこう。『源氏物語』に「上衆めく・上衆めかし」は全部で七例あったが、その過半数の四例はむしろ「上手めく」とした方が良いことを述べた。そうなることと検討すべき用例は残りの三例ということになる。それは以下のような例である。

- ①おほえいとやむごとなく、上衆めかしけれど、わりなくまづはさせたまふあまりに、さるべき御遊びのをりをり、何ごにもゆゑあることのふしぶしには、まづ参上らせたまふ、
(新編全集桐壺卷19頁)

- ②浅からずしめたる紫の紙に、墨つき濃く薄く紛らはして、思ふらん心のほどややよいかはまだ見ぬ人の聞きかなやまむ

手のさま書きたるさまなど、やむごとなき人にいたう劣るまじう上衆めきたり。
(明石卷250頁)

- ③女君にかくなむと聞こゆ。なかなかもの思ひ乱れて臥したれば、とみにしも動かれず。あまり上衆めかしと思したり。

(松風卷416頁)

①は最初にあげた桐壺更衣の例である。ここに「おほえいとやんごとなく」⁽⁷⁾とあるが、物語の冒頭では「いとやむごとなき際にはあらぬが」(桐壺巻17頁)とあったはずである。要するに帝の寵愛の深さと更衣の身分の低さが不一致なのである。そして更衣はたいそう高貴な身分ではないが、いかにも高貴な人のように見える、あるいは振る舞っているというわけである。しかしそれはそう見えるだけで、決して本質(女御)ではなかった。

「上衆めく・めかし」は非常にデリケートな語であり、これが付けられていることで、本来そうあるべきではないのに、という但し書きが付与される(差別語の一種)。そういった身分の人を寵愛することは、世間に納得されることではなかった。

その桐壺更衣の宿命が、②③の明石の君にも継承されている。②は筆跡のことだが、「やむごとなき人にいたう劣るまじう」とあるように見かけのことであるから、桐壺更衣と同じく本質は「やむごとなき人」ではないことが表明されていると見たい。もちろん筆跡に関しては、楽器の演奏と同様「上手めき」(プラス評価)とすることもできる。もしそうなら「上手めき」はプラス評価、「上衆めき」はマイナス評価と使い分けられている

ことになる。あるいは掛詞のような特種用法であろうか。

③は物思いに乱れて見送りに出てこない明石の君に対する源氏の感想である。ここは「あまり」とあるように明石の君の行き過ぎた態度が、かえって源氏から非難されている(マイナス評価)⁽⁸⁾。これなど『平中物語』や『紫式部日記』に通底する用法であろう。

繰り返すが、「上衆めく・上衆めかし」の全三例は、桐壺更衣に一例、明石の君に二例(筆跡を除くと一例)用いられていることになる。この二人は血縁関係にあり、また総体的に身分がやや低いという共通性を有していた。その二人が少ないながら全用例を分け合っているのである。というよりも、桐壺更衣の立場を明石の君が継承しているのである。

そもそも「上衆」というのは、それだけで高い身分の人であることを意味した。それに「めく・めかし」という接尾辞が付くことで、本来そうでない人がそのように見える、あるいはそう振る舞っていることを表すことになる。もしそうなら、「めく・めかし」にはそうでない者の悲哀のようなものさえ看取できるのではないだろうか。桐壺更衣は、更衣の分際で桐壺帝の寵愛を受けたことが悲劇の始まりであった。だからこそ弘徽殿

女御達に「めざまし」と思われたのである。同様に明石の君も、源氏から身分不相応に寵愛されたことで、紫の上から「めざまし」と思われている。二人は相似形であり、紫のゆかりとは別のもう一つのゆかりと見ることもできる。

六、『源氏物語』以後の用例

ついでに『源氏物語』以後の例も見ておきたい。『狭衣物語』の最初の例は、飛鳥井の女君の筆跡について、

渡らなん水増さりなば飛鳥川明日は淵瀬になりもこそすれ

6と、その行ともなく、書きすさみたるやうなる筆の流れなど、わざと上手めかしからねど、なべてならずをかしう、らうたげにて見ゆるに、思ひなしにや。

(新編全集巻一125頁)

とある。漢字は「上手」が宛てられており、そのため現代語訳も「上手ぶっているわけでもないが」と訳されている。『源氏物語』の②は「上衆」であったが、ここは書の上手下手と解している。それならプラス評価となる。打ち消しを伴っているこ

とがややこしい。あるいは飛鳥井の女君ということで、明石の君同様に「上衆めかし」との二重構造と見ることもできる。

二例目は東宮の筆跡であり、

頼めつつ幾夜経ぬらん竹の葉に降る白雪の消えかへりつ

つ
7御硯の水いたう凍りけりと見えて墨枯れしたる、あてにをかしげなり。文字様などこそ、上衆めかしきところなけれ

(巻二244頁)

とやはり否定的に記されている。漢字こそ「上衆」であるが、現代語訳では「練達という風ではないが」とあって、これは明らかに「上手めかし」の訳となっている。直前に「あてにをかしげ」とあるのだから、ここで再度「貴人めいて」と繰り返すことはあるまい。まして東宮の筆跡であるから、これは「上手めかし」(書道の腕前)と解すべきであろう。

三例目は、院の女御の筆跡について、

8文字様など、わざと上手めかしうはなけれど、墨つき筆の流れもあやしうなべてならずなまめかしげにて書き流したまへり。

(巻四232頁)

とやはり否定的に出ている。院の女御も貴人であるから、「上

衆めかし」とは解しにくい。以上のように『狭衣物語』の特徴は、三例すべてが筆跡についての例なので、「上手」に統一しても良さそうである。加えて『狭衣物語』では、打ち消しを伴った「めかし」で統一されている。しかも三例中二例には「文字様」「わざと」「筆の流れ」「なべてならず」が共通しており、かなりパターン化された描写となっている。

『夜の寢覚』の二例は非常に近接したところで、9秋風楽を、ただ今の折に合はせて弾きたまへる、すべて十余の人の琴の音とも聞えず、上衆めきおもしろき事かぎりなし。母君の御琴は、すぐくあはれになつかしきところぞ、げに天人の耳にも聞き過ごさるまじくいみじき、これは、いとおもしろく美々しく、そぞろ寒く上衆めかしきこと、いまからすぐれたまへるに、

(新編全集『夜の寢覚』巻五492頁)

と、姫君の琴の演奏に関して用いられている。頭注二九では「上衆めく」は、貴人らしい様子。高貴に感じられる」としているが、ここは琴の演奏についてのことであるから、演奏の腕前ということで、まずは「上手めかし・上手めく」の意味とするのが適切ではないだろうか。

残る二例は、

10 さこそ上衆めかしくもてなし鎮めたれど、深くもあらぬ若き心地には、いと苦しく、背きがたくおぼえければ、

(同巻一72頁)

と、

11 ただかうながら、恥あるべうもあらず。上衆めき、うつくしげなるさまを、うち傾きつつ、

(同巻三232頁)

である。前の例は女房の新少将が、中の君の素性を中納言に明かす場面である。「貴人らしく振る舞」つていても、若い新少将には秘密を隠し通すことはできなかった、とあるのだから、これも偽物（マイナス）の「上衆」と解釈してよさそうである。二つ目は石山の姫君の筆跡に対する評価となっている。頭注四に、「上衆めく」は、貴人としての品格を備えている意だが、ここは能書の素質があることを含めていよう。」とあるので、この例も「上手めき」とすべきではないだろうか。以上、『夜の寢覚』では四例中三例が「上手」でよさそうだ。

次に『浜松中納言物語』の例であるが、

ふるままにかなしささまさる吉野山うき世いとふとたれたづねけむ

12 墨つき、筆の流れ、まことしう上衆めきてうつくしきを、

かたちはさこそ、前の世の功德の報いならめ、さる、ひたぶるに世を棄て給へりし上の御かげにて、いとかう手をさへ書きすぐり給ひけむと、あさましきまで、うち置きがた

く見給ふ。(新編全集『浜松中納言物語』巻四328頁)

とあって、吉野の姫君の筆跡の評価に用いられている。吉野の姫君は高貴な人であり、身分的な劣等感などは存在しないので、ここは「上手めき」(能書)としたい。なお『平中物語』以後、『紫式部集』を含めて和歌の直後に用いられている例が多いことにも留意しておきたい。こうしてみると琴の演奏や筆跡に用いられている例は、「上手」の意味で解釈した方がよさそうである。

その他、『無名草子』にも一例認められるが、それは『狭衣物語』評の中に、

13 「少年の春は」とうちはじめたるより、言葉遣ひ、何とな

く艶にいみじく、上衆めかしくなどあれど、さして、そのふしと取り立てて、心に染むばかりのところなどはいと見えす。(新編全集『無名草子』220頁)

と出ている。これは『狭衣物語』の本文引用部分ではなく、物

語の文体が上品だという意味で用いられているのであるから、『源氏物語』のような悲哀も劣等感も看取されない。

次に『とりかへばや物語』の一例は、

14 「あたら、いみじうおはするに、人を人ともせずもの遠く上衆めきたまへる」など、そればかりをぞ難に思ひきこえ

たりつるを、(新編全集『とりかへばや物語』巻二309頁)

とあって、男装の女君の態度に対する批判を含んでいる。女君は上流貴族であるから貴人らしくというよりは、むしろお高くとまっているという意味(マイナス?)であろうか。男装の女君だけに、やや特殊な用法と言える。

『木幡の時雨』には、

15 忍びやかに箏の琴をかきならず爪音いと上衆めかしう、御心にしみかへり、あはれと聞きおはす。(中世王朝物語全集⑥12頁)

と、

16 さしやりてかき鳴らし給ふ爪音まだ若けれど、上衆めかしう懐かしきほどなり。ありし爪音思しいづるにもあはれにて、(同24頁)

の二例がある。前者は姫君の演奏する琴であるが、現代語訳は

「たいそう上品で」としているが、ここは「上手」（演奏の力量）とすべきであろう。後者は姫君の妹の演奏である⁹。紫の上と同様に「まだ若けれど」に続いている。

なお『徒然草』の二三三段の末尾にある、

17万の咎は、馴れたるさまに上手めき、所得たるけしきして、人をないがしろにするにあり。

（新編全集『徒然草』262頁）

は、男女や身分に関係なく「上手ぶる」としているが、下に得意がって「人をないがしろにする」とある点、むしろマイナス用法としての「上衆」とした方がよさそうである。

結

以上、「上衆めく・上衆めかし」に注目して、用例を総合的に検討してみた。その結果、新編全集の本文校訂において、「上衆」と「上手」が混同されていることが明らかになった。

それを私に厳密に分けてみたところ、「上手」は演奏（十三例）や筆跡（五例）などの技能に集中して用いられており、プラス用法になっている。

それに対して「上衆」は、『源氏物語』において非常に特殊な使われ方をしていた。というのも、用例が桐壺更衣と明石の君の二人に集中しているからである。二人は単に血縁というだけではなく、共に身分的な低さという短所を有しており、それが「上衆めく・上衆めかし」のマイナス用法に顕著に表れていたのである。なお明石の君の用例が多いのは、「上手」の例が明石の君の琵琶の演奏や筆跡に用いられたことで、「上衆めく」「上手めく」両方から二重に規定されているからである。

そもそも「上衆」とは身分の高いことを意味する語であるが、それに「めく・めかし」が付くと、本来は高い身分ではないが、いかにも身分高そうに見えるという意味になる。しかしたとえどんなに「上衆めく・上衆めかし」く見えても、それは虚構・幻想でしかなかった。だからこそ批判の意味も込められるのである。明石の君は、桐壺更衣の容貌ではなく、身分的な悲哀を継承したもう一つの「ゆかり」であった。その意味でも「上衆めく・上衆めかし」は、明石の君論のキーワードとして有効であろう。

それに対して『源氏物語』以外の例は、女性に付与されている『平中物語』の二例と『紫式部日記』の一例・『紫式部集』

の一例、それに『夜の寢覚』の新少将の例が、『源氏物語』の用法に近いものであった。ただし『紫式部日記』や『夜の寢覚』の新少将の例にしても、一回的な女房の用例ということで、単なるマイナス用法に留まっている。そうなると女房とは異なる明石の君の例は、『源氏物語』の特殊用法と言つてよさそうである。こんな些細な表現からでも、物語の読みを深めることは可能であつた。

〔注〕

- (1) 吉海直人『源氏物語〈桐壺巻〉を読む』(翰林書房) 平成21年4月。なお本書は吉海『源氏物語の視角』(翰林書房) 平成4年11月の改題テキスト版である。
- (2) 「上衆」の例は『源氏物語』以外にも用例は見当たらない。『うつほ物語』祭の使巻に「上衆の所にうち出でたるに」(506頁)とあるが、底本は「大す」なのでこの例は保留にしておきたい。

(3) 加藤史子氏『無名草子』物語論批評の方法——「心上

衆」を手がかりとして——高野山大学国語国文14・昭和62年12月参照。これにしたところで、意味の相違から「心上手」である可能性がある。

(4) 類似した語に「上臈・下臈」がある。なお「上臈」には「めく・めかし」ではなく「だつ」が付く。

(5) 「上衆」の用例はないが、「上手・上手ども」はある。また「上手」の反対の「下手」は認められない。

(6) 内藤聡子氏『源氏物語』若菜下、女衆における琵琶叙述について——「上手めく」「上衆めく」をめぐつて——愛知大学国文学42・平成14年11月↓『日本語の語義と文法』(風間書房) 平成19年1月参照。なお内藤氏は新大系の頭注が、「(明石君の)琵琶は際だって気品があり、古風を伝えた弾き方は、音色も澄みきって興味深く聞かれる。「上手」は「下種」に対する「上す」か。「調べたる程、いと上ずめきたり」(二明石八三頁一三行)とあった。(338頁)と「上衆」に傾いていることも指摘しておられる。

(7) 玉上琢弥氏『源氏物語評釈』の注に「帝の寵愛のことなら、「御おほえ」と必ず敬語がつく。人々のおほえであ

る」(37頁)とあるが、そうなると冒頭の「いとやんことなききはあらぬ」と齟齬しないだろうか。

(8) 本田義彦氏「源氏物語存疑「上衆めかしと思したり」九州大谷国文17・昭和63年7月参照。なお本田氏は松風巻の解釈について、従来の「上臆ぶる」(マイナス評価)ではなく「上臆らしく」とすることで、源氏が明石の君をプラス評価していると解釈しておられる。いずれにせよ両用の解釈が可能な点こそ、明石の君の特徴と見たい。

(9) この後の展開は、『住吉物語』を下敷きにしており、三の君の「何心」ないおしゃべりから、中納言は姫君が三の君の姉(中の君)であることを知る。ただし継子苛めの『住吉物語』と違って、『木幡の時雨』では中の君も母上の実子であるが、乳母の少納言が夫の右衛門督から寵愛されていた縁で、中の君を憎んでいるという設定になっている。

